

まえがき

「宗教って何、必要なの?」と学生からよく問われる。宗教の定義はさまざまに適切な回答を示すのは容易ではない。たまたま筆者の担当するクラスで筆者が語る前に「宗教とは」と問いかけた調査では次のような回答が寄せられた。さまざまな表現を整理して回答数の多い順に列挙すると、1. 人生、生きていることの意味、言葉を教えるもの、2. 先祖から続く教え、伝統、3. 信ずる対象、4. 願いごとを叶え、幸せになるためにあるもの、5. 仏教、キリスト教、イスラム教、6. 堅苦しいもの、古いもの、7. 自分にはかわりのないもの、8. 自分を見つめなおすもの、9. 団体、団結、パワー、10. 感謝を大切にすること、11. 悪いところを発見し治すもの、12. 寺、仏壇、大仏、お経、宗教戦争、行事、輸血禁止、13. 大切なもの、人を魅了するもの、14. 神聖、奥深いもの、15. 悪いイメージ、といった内容であった。これらの回答からしても宗教を一元論的に語ることは難しい。

まもなく節分会がやってくる。あれを一つの宗教行事とみなす人は多い。宮中の年中行事の一つである追儺ついなの儀式が民間の節分行事になったようだ。その際、狂言にもとづくようであるが「鬼は外、福は内」と発して豆を撒いて鬼を追い払うことになっている。その場合、鬼とは何であろうか。自分にとって不都合なものをみな鬼にしてしまっているのではなからうか。そうであれば節分会という宗教行事は典型的な欲望成就を目的とするものでしかない。豆を自分に向けて撒いて自己を問うならば、宗教行事になるかもしれないと思考する。

筆者は、今、宗教とは、「真実の私に遇うはたらき、私の真実に目覚めさせるもの」と学生に伝えている。それでは「真実の私、私の真実」とは何であろうか。それは、縁起的存在、罪悪深重なる存在、とまとめられるであろう。紙数の都合上、前者について一言述べることにする。

縁起的存在とは、「生かされている私」の発見に他ならないことを、時間的空間的視点から観察できるが、ここでは前者の視点で「私の真実」に触れてみたい。

『歎異抄』第五章の次の一節が思い浮かぶ。

一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄妹なり。

仏教では有情とは動物をもふくめたいのちある存在であるからなんと広大な発想であろう。しかし我々人間が実感できないでいるだけであって、生物学の世界では人類の祖先とチンパンジーの祖先とは近いものであると言われている。しかもこの見解は親鸞聖人だけの独自のものではなさそうである。古くインドにおいて同じ見解を抱いていた学僧がおられたことを示す資料がある。

四〜五世紀のアサンガ（無着）は次のように言う。

一切の有情は、無始よりこのかた生死を遍歴し長時にわたり流転するとき、互いに、父、母、兄弟、姉妹、師、高貴で権勢の人に、ならないことはない。かかる因縁によって、一切の敵はみなわが友人でないことはない。

〔瑜伽師地論〕「聲聞地」

この文言から宗教戦争に思いがゆく。今戦闘中のキリスト教とイスラム教は、元はユダヤ教から派生したものでなかったか。

さらに、八世紀インドのカマラシーラ（蓮華戒）も次のように言う。

無始以来の輪廻において何百回（と輪廻転生する）うちには、自分の血縁にならなかつた有情は誰もいない。

〔修習次第〕初篇、中篇

このように、時間的視点だけから私を問うても無限にして無量な時間の流れにおいて私のいのちが与えられていることを噛締めざるを得ない。「私のいのち」と所有格で表現されたり、私物化、私有化が許されない「私の眞実」に出遇うのである。かかる「私」に出遇うと、また『歎異抄』第五章のつぎの一節に頷かざるを得ない。

親鸞は父母の孝養のためとて、一辺にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。

本誌は、本学主催の恒例の「宗教講座」における講話を収録している。講題、テーマはさまざまのように見受けられますが、一読していただければさまざまな角度から前記「眞実の私、私の眞実」（縁起的存在、罪悪深重なる存在）発見に寄与する論稿に思える。

京都光華女子大学・同短期大学部

学長 一郷正道